

糸井馬場第1号古墳

1988

広島県立埋蔵文化財センター

例　　言

1. 本書は、昭和62（1987）年度に実施した県営ほ場整備事業（糸井地区）に伴う広島県三次市糸井町697番地所在の糸井馬場第1号古墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、広島県教育委員会が得た昭和62年度国庫補助金をもって、広島県立埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は唐口勉三、松村昌彦、遺物の写真撮影は伊藤 実が行い、本書の執筆、編集は松村が行った。
4. 本文中に使用した方位は磁北である。
5. 本書で使用の遺跡名は、文化庁文化財保護部編集『全国遺跡地図』34広島県 によった。
6. 第1図「周辺主要古墳群分布図」は、建設省国土地理院発行の50,000分の1地形図（三次）を使用した。
7. 糸井馬場第1号古墳は、当初、糸井馬場第1号古墓と呼称していたが、調査の結果、古墳であることが明らかになった。また、広島県双三郡史料総覧刊行会『広島県及三郡史料総覧』第5篇 昭和49（1974）年の糸井第22号古墳に相当することが判明し、名称を変更した。
8. 本古墳についての理解を深めるため、本書と同時に刊行される『糸井馬場第2号古墳・糸井塚の本第2号古墳』（財団法人広島県埋蔵文化財調査センター）を併読されたい。



目 次

I はじめに	(1)
II 位置と環境	(2)
III 調査の概要	(5)
IV まとめ	(10)

図 版 目 次

図版 1 a. 糸井馬場古墳群近景（東から）	図版 4 a. 古墳全景（南から）
b. 同 上 （北から）	b. 同 上 （北西から）
図版 2 a. 調査前近景（西から）	図版 5 a. 盛土の状況（南西から）
b. 表土除去（西から）	b. 陸橋部（南から）
図版 3 a. 古墳群近景（東南から）	図版 6 a. 性格不明遺構（西から）
b. 同上調査風景（西から）	b. 古墳出土の鉄刀

挿 図 目 次

第1図 周辺主要古墳群分布図（1：50,000）	(3)
第2図 周辺遺跡分布図（1：10,000）	(4)
第3図 糸井馬場古墳群地形図（1：500）	(5)
第4図 墓丘実測図（1：200）	(7)
第5図 墓丘土層実測図（1：100）	(8)
第6図 鉄刀実測図（1：4）	(8)
第7図 性格不明遺構（S X）実測図（1：30）	(9)
第8図 墓丘断面復元図（1：200）	(10)

I はじめに

発掘調査は、広島県三次市糸井町における県営は場整備事業（糸井地区）に係るものである。同事業は、糸井町内の道路及び用排水路を完備し、耕地を整備することにより、労働生産性の向上を図り、専業農家の育成をしようとするもので、昭和57（1982）年度から120haについて事業施工されている。これに先立ち、広島県三次農林事務所（以下「三次農林」という）は、昭和55（1980）年10月、広島県教育委員会（以下「県教委」という）に、事業予定地内の埋蔵文化財の有無並びに取扱いについての照会を行った。県教委は分布調査を実施して13遺跡を確認し、その旨を回答するとともに協議を重ねた。この結果、昭和58（1983）年、地区外となる糸井第1号古墓を除く糸井古墓群5か所のうち、第2号古墓を広島県立埋蔵文化財センター（以下「県立センター」という）、第3～6号古墓を財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「財団センター」という）が発掘調査を実施し報告書を刊行した。

その後、昭和61（1981）年7月、三次農林から県教委に現状保存が困難である馬場第1・2号古墓及び糸井塚の本第2号古墳について発掘調査の依頼があった。県教委は財団センターと協議の結果、文化庁と農林省との協議に基づき文化庁から各都道府県教育委員会に通知された「農業基盤整備事業等と埋蔵文化財の保護との関係の調整について」（昭和50年10月20日府保記第221号）により、経費の農家負担に相当する部分（20%）を県立センター、事業者負担分に相当する部分（80%）を財団センターが調査を行うことになり、県立センターは馬場第1号古墓、財団センターは馬場第2号古墓及び糸井塚の本第2号古墳を調査した。馬場第1号古墓の調査は、昭和62年（1987）年10月5日～30日まで行い、調査経費は、1,300千円（うち国庫補助金650千円）である。なお、本古墓は調査の結果、古墳であることが判明したため、名称を糸井馬場第1号古墳に変更した。また、11月14日に文化財の教育・普及活動の一環として、財団センター、三次市教育委員会と共に遺跡見学会を開催した。

発掘調査にあたっては、地権者の千崎末夫氏、三次農林、広島県立歴史民俗資料館、財団センター、三次市教育委員会及び地元の方々から多大な御協力を得た。また、瀬見 浩氏（広島大学教授）、古瀬清秀氏（広島大学助手）からは御指導、助言をいただいた。記して感謝の意を表する次第です。

II 位置と環境

糸井馬場第1号古墳が所在する三次市は、中国脊梁山地の南側に位置し、馬洗川やその支流の美波羅川などの河川によって形成された三次盆地を中心を開けた県北の中核都市である。盆地の北側は標高400~500mの山が囲み、南側は標高250~350m（水田からの比高20~150m）の丘陵が樹枝状によく開析されて広がっている。水田は馬洗川や美波羅川などの河川に沿う冲積地のほか、丘陵に沿って細長く延びた谷水田がよく発達している。またこの地は地理的に山陽と山陰の中間に位置し、古来、交通上の要地である。幾つかの鉄道・国道が山陽と山陰を結び、中国自動車道も三次インターチェンジが設けられて、広島市・九州・近畿方面と結ばれているなど交通上の機能も高い。

三次市は県内有数の遺跡密集地として知られ、県北の原始・古代の歴史的環境を知るうえで重要な遺跡が多数存在している。遺跡の大部分は古墳で、昭和30（1955）年頃から岩脇古墳、善法寺古墳群、太郎丸古墳などの調査が行われ、昭和48（1973）年頃になると中国自動車道の建設に伴い、古墳のほか中世の城跡なども調査された。その後、旧石器時代の遺物の出土と古代の三次郡衙跡と推定される建物跡の下本谷遺跡、縄文時代早期の住居跡・弥生時代の四隅突出型前方後方形墓（史跡矢谷古墳）・古墳時代の集落跡・窯跡などの松ヶ迫遺跡群、弥生時代墳墓の史跡花園遺跡、弥生時代中期の長方形墳墓の殿山38号墓、県史跡酒屋高塚古墳、史跡寺町廃寺跡など重要な遺跡の調査が相ついで行なわれた。

糸井馬場第1号古墳が所在の三次市糸井町は、市街地から国道375号を南東に約7.5km、馬洗川の支流である美波羅川に沿った田園地帯で周辺には多くの古墳がある。古墳は糸井町の北方では冲積地や支谷に面した低丘陵上に分布し、糸井町の南方では冲積地に面した丘陵尾根や斜面などに多く分布している。この地域の主な古墳群としては、みよし風土記の丘の史跡淨樂寺・七ツ塚古墳群（172基）、勇免古墳群（30基）、萱草古墳群（27基）、法那古墳群（43基）、上定⁽¹⁾古墳群（31基）、殿山古墳群（38基）、上志幸古墳群（35基）、畠原古墳群（23基）、大平山古墳群（28基）などがある。この地域の古墳群は、いくつかの支群に分れるもの、小型の前方後円墳や帆立貝形古墳が1~2基あるもの、やや規模の大きな円墳が群の核となるもの、数基の円墳からなるもの、後期古墳のみのものなどがあり、そのあり方は多様である。この違いは、生産力や集落の規模などの経済的・社会的要因や有力首長層の存在、自立性のある集団の成立などによるためと考えられる。調査された古墳としては、畠原開山第9号古墳、川西第1~5号古墳、勇免第2~8号古墳、畠原第12~16及びA、B号古墳、五反田第1・2古墳、上定第25~27号古墳などがあるが、いず

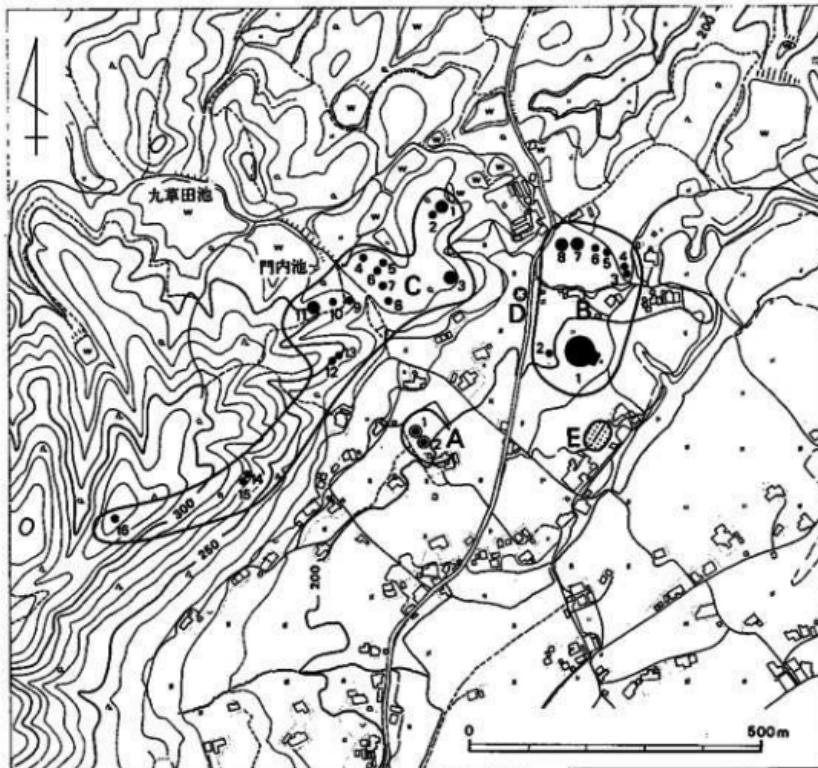


第1図 周辺主要古墳群分布図 (1 : 50,000)

- | | | | |
|-------------|-------------|---------------|--------------|
| ◎糸井馬場古墳群 | 1. 糸井塚の本古墳群 | 2. 糸井藤治古墳群 | 3. 一本木古墳群 |
| 4. 五反田古墳群 | 5. 岩倉古墳群 | 6. 清樂寺・七ツ塚古墳群 | 7. 勇免古墳群 |
| 8. 蓬草古墳群 | 9. 法郎古墳群 | 10. 上定古墳群 | 11. 肥山古墳群 |
| 12. 煙原開山古墳群 | 13. 上志幸古墳群 | 14. 煙原古墳群 | 15. 大平山古墳群 |
| 16. 大仙平古墳 | 17. 糸井大仙古墳 | 18. 糸井中ノ戻古墳群 | 19. 糸井見ノ越古墳群 |
| 20. 大姉古墳群 | 21. 山手古墳群 | 22. 上海渡古墳群 | 23. 下庄古墳群 |

れも5世紀以降のもので4世紀代とされるものは確認されていない。また、大型古墳が少なく、大部分は径5~15m、高さ1~2mの小規模古墳である。

糸井馬場古墳群は、美波羅川に沿った標高約180mの沖積地の西方にあって、沖積地から15~25mと一段高く、南西~北東方向に崖面を形成した河岸段丘上にある。この段丘上は水田となっており、本古墳群の北東約300mには全長65m、高さ10mの県内最大規模の帆立貝形古墳である糸井塚の本第1号古墳（通称糸井大塚）があり、隣接して同第2号古墳、北方丘陵上に同第3~8号古墳がある。また、糸井大塚の南方には7世紀末頃の須恵器などが出土した照善坊北遺跡があり、糸井馬場古墳群の背後にある北東に延びる低丘陵上には糸井屬泊古墳群がある。



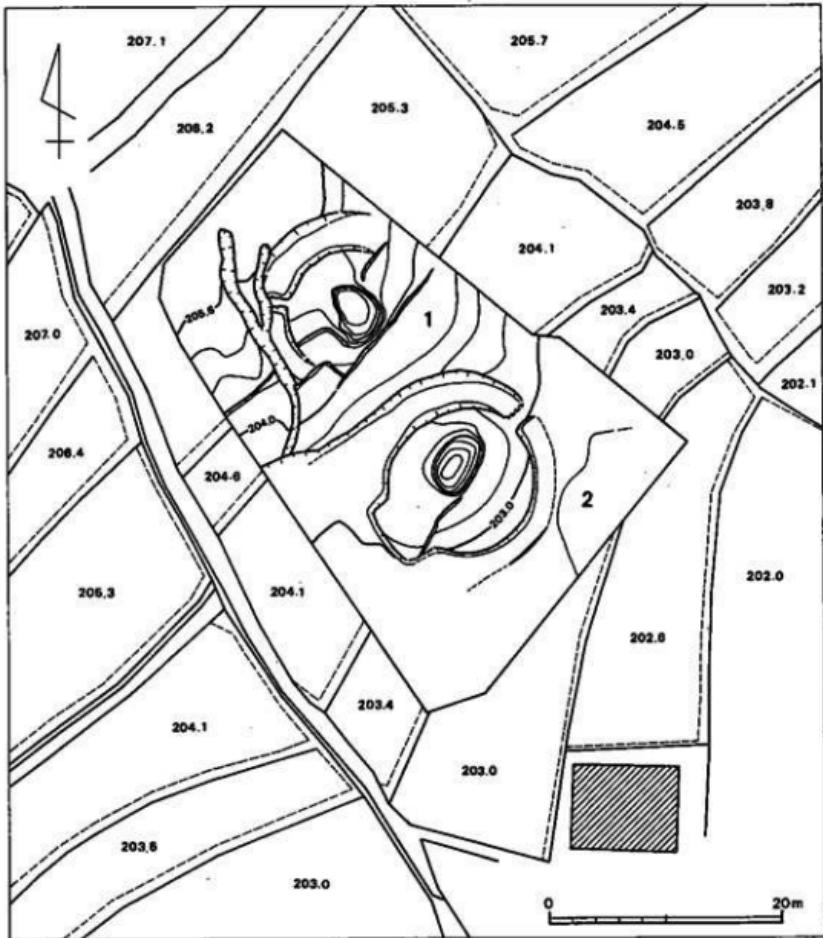
第2図 周辺遺跡分布図 (1:10,000)

A. 糸井馬場古墳群 B. 糸井塚の本古墳群 C. 糸井屬泊古墳群 D. 鐵冶屋追遺跡 E. 照善坊北遺跡

III 調査の概要

1. 調査の状況

糸井馬場古墳群は2基からなり、南東に緩やかに下がる地形に営まれた水田のなかにある。墳丘の一部は畦畔として利用され、古墳としては小規模で、高所側のものを馬場第1



第3図 糸井馬場古墳群地形図 (1 : 500)

号古墓。下方側のものを同第2号古墳と呼称されていた。調査前のボーリングステッキによる探査では、墳頂部の表土下約20cmに礫があり、墳頂部を覆っていることが推定されるなど中～近世の古墳と考えられた。

調査は土層観察用の土堤を墳頂から十字形に残して表土を除去するとともに、墳丘裾の確認のため周辺の水田部分を掘り下げた。この結果、表土下約20cmで墳頂部を覆う礫群から、明治一昭和初期の土器片、瓦片の出土があり、礫群はこの時期に積み上げられたことが明らかになった。一方、墳丘周辺の水田のうち北側の水田は、戦前に幅が狭く細長い3枚の水田があり、高所側を削り、低所側を埋めて現在の水田とし、第1・2号古墳の間にある南側の水田も同様に2枚の水田を現在の水田にしたことが明らかになった。

本古墳（古墳）の調査と並行して進められた第2号古墳（古墳）で周溝と須恵器が見つかり古墳と判断されたことから、本古墳も古墳の可能性が高くなり、周溝の確認を進めた。この結果、北～南西側に周溝を確認し古墳であることが明らかになった。なお、古墳と考えられていた東西約4.5m、南北約5.7m、南側の水田面からの高さ約1.9m、南側の水田面からの高さ約0.7mの梢円形の高まりは、古墳の周囲や墳頂部が削平されて、墳丘中央付近の盛土がかろうじて残った部分であった。

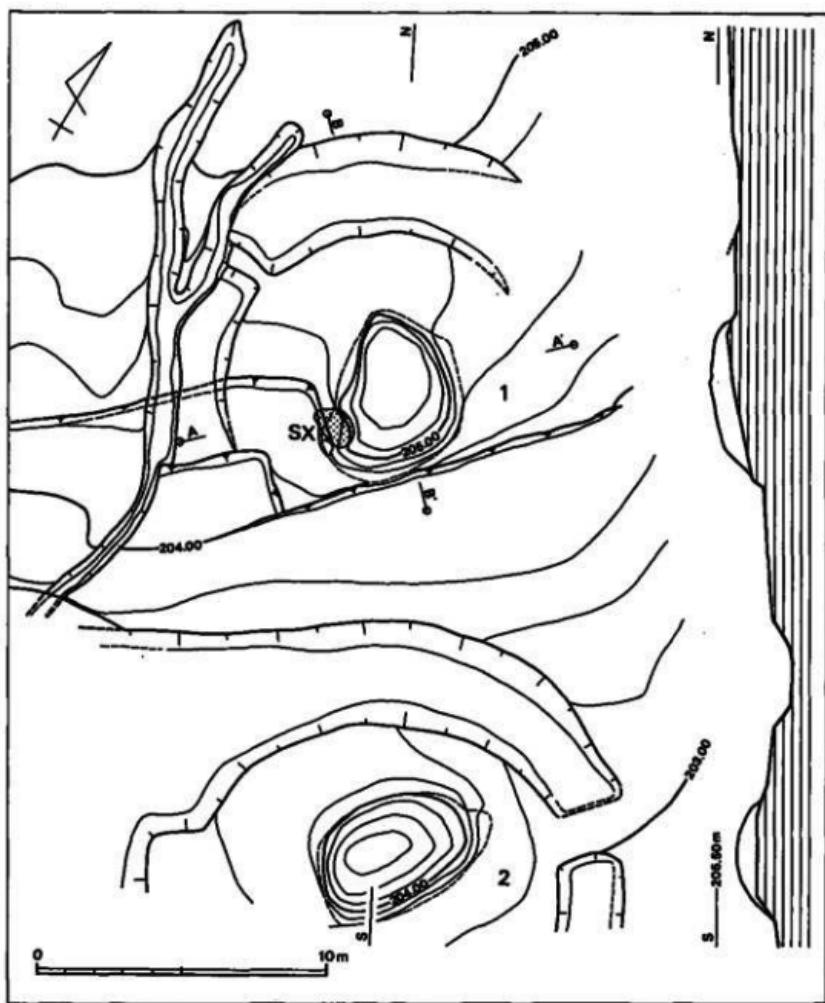
埋葬施設を確認するため墳丘を掘り下げたが、埋葬施設の痕跡はなく、墳丘中央付近の表土下から鉄刀片が出土した。以前に本古墳から刀が出土し、もとの場所に埋め戻されたと伝えられており、鉄刀片が出土した付近に埋葬施設があったことが推定された。

2. 墳丘

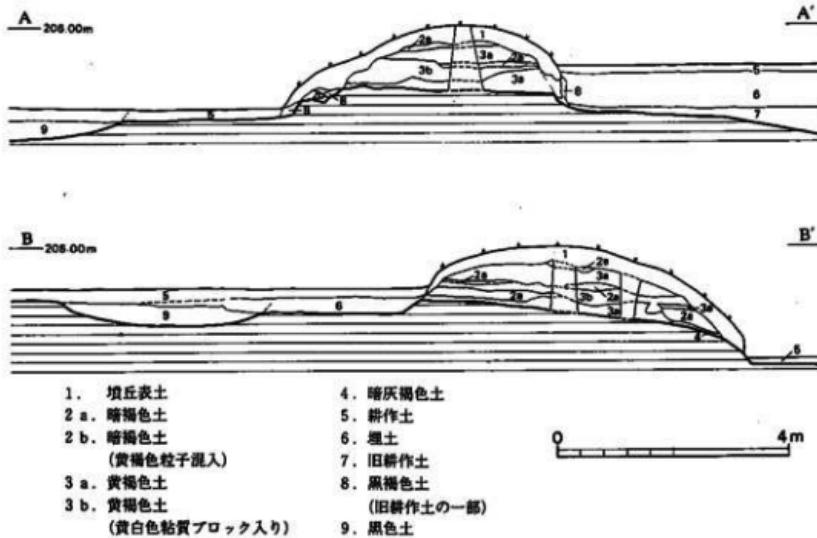
地形が高くなっている古墳の北側から西側にかけては周溝がめぐり、南西側に続いている。古墳の南東・東側は地形が次第に下っているため、墳丘裾の状態は不明で、周溝の有無についても明らかでない。地形の状況からすると、周溝があった可能性や第2号古墳にある造出部が取り付いていた可能性は少ない。また、地形が下がる現墳丘の南側も地形が下がり、隣接して第2号古墳の周溝があるため、やはり周溝や造出部があった可能性は少なく、墳丘の外側には周溝外縁の立上がりのない平坦面（テラス）がめぐっていたと推定される。従って、本古墳の墳形は円墳で、規模は周溝の状態からすると、溝底の墳丘立上がりからの径約11m、周溝及び推定される平坦部を含む規模は約17mと推定される。

盛土は墳丘の中央部付近のみ残っている。北西～南東（B-B'）の土層によると、地形が下がる南側にある薄い暗灰色土は旧表土の可能性があるが、その上の暗褐色土は盛土である。中央付近と南西～東北（A-A'）の土層によると東側にはやや厚い黄褐色土がある。この土は、黄白色粘質ブロック入りの黄褐色土とともにとは地山の土であろう。

A-A'では黄白色粘質ブロック入りの黄褐色土の上に薄い暗褐色土、その上に厚い黄褐色土、そして薄い暗褐色土と互層に盛土している。B-B'もほぼ同様であるが、薄い暗褐色土が途切れながら存在し、全体としては南側にやや傾斜しながら盛土されている。基本的にはこれより上方や墳丘裾も互層に盛土されていたと推定される。



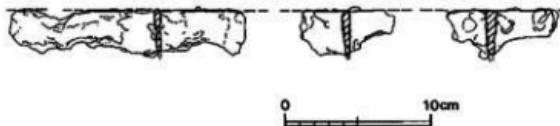
第4図 墳丘実測図 (1 : 200)



第5図 墳丘土層実測図 (1 : 100)

3. 周溝

周溝は上端幅約3.2~3.4m、下端幅(溝底幅)1.8~2.2m、深さは墳丘側で約0.3m、周溝外縁側で0.4mである。溝底は平坦であるが、地形が下がる北東側になるほど次第に不明瞭となる。西側には陸橋部があるが、周溝外縁側が自然流路で削られており、現長約2.2mである。上端幅は0.5~0.7m、下端幅は1.4~1.6m、高さは約0.3mである。自然流路は、陸橋部の南約2m付近で2本が合流し南に下がっている。周溝の幅及び周溝外縁の円弧の状況からすると、この自然流路の西側上端付近に周溝の外縁がめぐっていたと推定される。これによる陸橋部の長さは2.5~2.8mである。また、陸橋部から南に約3m付近の幅は少なくとも約2.5m、同じく陸橋部から約4.5m付近の幅は3m前後と推定され、後者の溝底は北西側の溝底に比べて約0.3m下がっている。これより南側は幅の狭い水田が地山を削っていることや地形が下がっていることから、周溝は確認できない。



第6図 鉄刀実測図 (1 : 4)

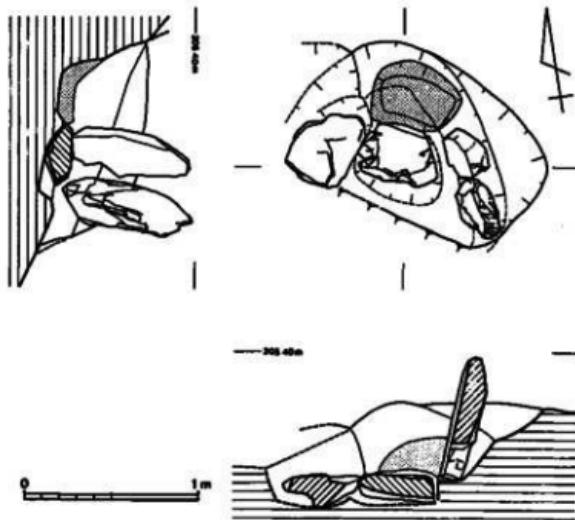
4. 出土遺物

墳丘中央付近の表土下から鉄刀片が出土したほか、北側の周溝内、墳丘立上がり付近で古式の須恵器甕の小片が出土した。また、墳丘表土や埋土から中国製青磁碗、朝鮮製青磁碗、伊万里焼系染付碗、唐津焼碗、小谷焼碗などの小片が出土した。

鉄刀のものとの長さは不明であるが、棟幅約0.6cm、刃幅約3.3cmで鏽化が著しい。

5. その他の遺構

南西側の墳丘裾にある性格不明の遺構である。焼土及び炭化物の入った $50 \times 36\text{cm}$ のピット、これを切って $1.4 \times 0.9\text{m}$ の半椭円形で南西側に立上がりのない土壠状の掘り込みのなかにある5個の石からなる。東側の2個の立石は高さ70cmと77cmで掘込みの底面に据えている。中央と西側の石はいずれも約 $45 \times 35\text{cm}$ で、上面を掘込みの底面にあわせて下方を掘り下げて据えている。このほか調査中に除去した石は西側の石の上にあり、動いた状態であった。出土遺物がなく、土壠状の掘込みの内には砾が流入し、土もしまりがないなど新しい時期のものであることが推定された。



第7図 性格不明遺構 (SX) 実測図 (1:30) : アミ目は焼土及び炭化物

IV まとめ

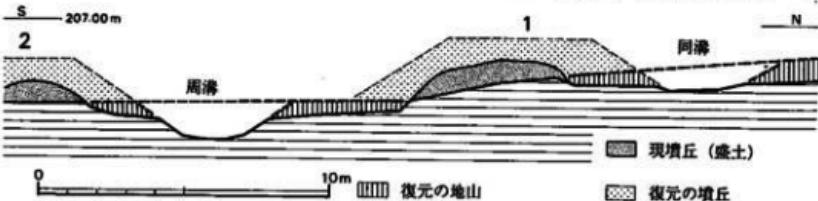
本古墳の概要については先述のとおりである。墳丘の一部が残っていたが、埋葬施設をすでに失い、出土遺物も少ないなど古墳の内容を知る手がかりは十分ではない。しかし、小規模古墳の立地や成立、古墳群のあり方、小型の帆立貝形古墳との関係などの知見を得ることができた。ここに若干を述べてまとめとしたい。

糸井馬場古墳群は、美波羅川の河岸段丘上にあり、本古墳と小型の帆立貝形古墳の第2号古墳からなる。第2号古墳は全長約15m、後円部径約13.2m、造出部の長さ約6.2mで、幅約3.5mの盾形の周溝がある。築造時期は出土の須恵器から5世紀後半頃とされ、三次盆地の小型の帆立貝形古墳の成立や本古墳との関係を知るうえで良好な資料である。

河岸段丘上には本古墳群のほか、県内最大規模の帆立貝形古墳である糸井塚の本第1号古墳（通称糸井大塚）とこれに隣接する同第2号古墳がある。また、この北方の低丘陵上に同第3～8号古墳、西方の低丘陵上に糸井鷹泊古墳群が糸井大塚を取り囲むように存在している。各古墳の築造には、糸井大塚の存在が意識されていたであろう。

現在、河岸段丘上に広がる水田の用水は、糸井鷹泊古墳群のある低丘陵の西側にある九草田池、門内池から丘陵を迂回して河岸段丘の北端から引いているが、河岸段丘上はいくらくか起伏があり、谷が浅く水が十分でない状況からすると、古墳時代の河岸段丘上は畠地、荒地、雜木林が多かったと考えられる。古墳時代中期の大型古墳は、低丘陵上、台地、水田に近い丘陵先端などに立地しているが、糸井大塚もこのような立地によく適合している。低丘陵上の各古墳は糸井大塚よりも高所にあり、糸井大塚を見下ろしている。このあり方は時期的な土地の利用の違いや古墳の築造時期の違いを示しているようである。

この地域の後期古墳は、糸井鷹泊古墳群から南西に続く丘陵上の大仙平古墳（第1図の16）～大津古墳群（第1図の20）、その東南方には山手古墳群（第1図の21）があり、時期によって立地が異っている。ところで、糸井大塚の周辺には5世紀末頃～6世紀中頃の古墳が明らかではないが、周辺の他の古墳群にはこの時期の古墳や、後期古墳もあること



第8図 墳丘断面復元図

からすると、糸井大塚の周辺に5世紀末以降も継続して築造されていると考えられる。とくに丘陵斜面にある糸井鷹泊第14、15号古墳や後期古墳の大仙平古墳などの立地に似た場所にある糸井鷹泊第16号古墳は築造時期が他の古墳よりも下っていると推定される。

糸井馬場古墳群は2基が隣接して並び、高所側に第1号古墳がある。このように同規模の古墳が並ぶものに、糸井塚の本第3・4、同第5・6、同第7・8、糸井鷹泊第1・2、同第4・5、同第6・7、同第10・11、同第12・13、同第14・15号古墳とこの地区的古墳の大部分がこのようなあり方をとっており、古墳群や支群の成立について一考させる。

地形上の立地による支群構成からすると、糸井鷹泊古墳群は7支群からなる。各支群は1基で構成（第3、6号古墳）、2基で構成（第2・3、第12・13、第14・15号古墳）、3基で構成（第9～11号古墳）、5基で構成（第4～8号古墳）となっている。なお、6基の構成に糸井塚の本第3～8号古墳がある。各支群の古墳数の違いはその成立や継続期間と関係するのであろう。ところで、糸井地区の糸井馬場、糸井塚の本、糸井鷹泊の3古墳群全体の範囲は限られており、周辺の古墳群とも一応区別される。これら3古墳群が成立了背景にある糸井地区的地理的状況や経済基盤を考えると、糸井馬場古墳群は独立の古墳群とするよりも、3古墳群を包括した古墳群の一支部と考えるのが妥当かも知れない。

次に馬場第1古墳についてみると、墳形は地形の状況や隣接して第2号古墳が存在することから、削平を受けている南東側に造出部があった可能性はなく、墳丘径約11mの円墳である。南東側の墳丘裾は地形、周溝外縁及び西側の溝底が次第に下がっている状況からみて、溝底幅程度の平坦面（テラス）がめぐっていると推定された。周溝及びこの平坦面を含む古墳の推定規模は約17mである。従って、周溝及び平坦面は通有の古墳と比べて広いといえる。本古墳の規模は先述した第2号古墳の後円部の径よりも若干小さいが、周溝外縁の径、周溝幅などはほぼ同様の規模である。また、本古墳の南東側の平坦部の端は第2号古墳の周溝外縁と企画上ほぼ一致した位置にある。これは先に築造された古墳の位置、範囲を後から築造した古墳が意識していたことによるためであろう。

墳丘の高さは、鉄刀が出土した付近に埋葬施設があったとすると、その上の盛土は現状よりもかなり高いことになる。本古墳と同時期、同規模程度の古墳の墳頂部は径5m前後が一般的である。また、本古墳の墳丘立上がり（墳丘裾）の傾斜角度は30～33度が平均である。このことをもとに墳丘の高さを復元すると、墳頂部は鉄刀が出土した付近から0.7～0.8m上である。地山から鉄刀が出土した付近まで0.8mであることから、墳丘中央付近の高さは1.5～1.6m、南側の平坦部からの高さは2.2m前後と推定される（第8図）。

本古墳の陸橋部は西側にあり、第2号古墳は北東側にある。本古墳は丘陵高所側に周溝

があることから、周溝側が背後、平坦部側が正面で、陸橋部は背後に設けたことになる。第2号古墳の陸橋部は古墳の正面を造出部側とすると背後にあたる。中期の前方後円墳の側面觀を正面とすると、高所側（第1号古墳側）を背後、下方（南東側）が正面であるが、いずれにしても、古墳の正面と墳丘に入る通路が別のものであったことを示している。

埋葬施設はすでに失っており、石材は本古墳の南西側の墳丘裾にある性格不明の遺構にある以外に周辺はない。埋葬施設が堅穴式石室であったとすると、石材は畦畔などに用いられていると考えられるが、その形跡は全くない。ところで、性格不明の遺構は覆土の状況からみて新しい時期のものと考えられ、東側の2個の立石は自然石による墓石に最も似ているが下部遺構がなく、中央と西側の石の下にも下部遺構はない。これらの石を最も近い場所から求めるすれば、本古墳の埋葬施設ということになる。東側の2個の立石は面が平坦で大きさもほぼ同じである。中央と西側の石も同様である。調査中に除去した石はやや小さいが四角い石である。これらの石材は通有の石棺では蓋石、側石、小口石に用いられているものと同じ大きさである。このような状況からすると、この石材は本古墳に用いられていた箱形石棺のものを転用したと考えるの妥当であろう。

本古墳に伴う遺物としては、鉄刀片と北側の周溝内、墳丘立上がりから出土した古式の須恵器壺の破片がある。この破片は第2号古墳出土の須恵器壺と極めてよく似ており、同一個体の可能性が十分ある。この破片が同一個体とすると、第2号古墳の築造時にすでに本古墳があり、第2号古墳の祭祀に用いられた壺が破片として何らかの理由によって本古墳にもたらされた場合と、第2号古墳の築造後、本古墳が築造された時に混入した場合とが考えられるが、そのどちらであるのか明らかでない。

本古墳と第2号古墳との土層による先後関係は明らかではないが、本古墳の下方に第2号古墳の周溝があるため緩斜面が狭い状況になっており、先述の正面觀からすると本古墳が先に築造された可能性がある。両古墳に先後関係があるにせよ、2基の古墳の被葬者は古墳のあり方からみて、密接な関係にあったことが知られ、本古墳はこの第2号古墳の築造時期からみて一応5世紀後半の築造と推定される。なお、第2号古墳は造出部を有するという特徴的な違いがあるが、これは被葬者の社会的地位と関わりがあると考えられる。

- 註
- (1) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「大河・上定・殿山」昭和62(1987)年。
 - (2) 本村豪章「備後三次市畠原開山第9号古墳」「古代吉備」第5集 昭和38(1963)年。
 - (3) 広島県及三郡史料叢書刊行会「広島県及三郡史料叢書」第5編 昭和49(1974)年の三若第23-27号古墳にあたり、本書の下庄古墳群に含まれる。
 - (4) 註(3)の文献に同じ
 - (5) 伊吹 尚「畠原古墳の発掘調査について」「広島県文化財ニュース」第46号 昭和45(1970)年。
 - (6) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「五反田第1・2号古墳発掘調査報告書」昭和60(1985)年。
 - (7) 昭和62年に鐵治屋追跡とともに工事中に発見された。

図版



調査風景



a. 糸井馬場古墳群近景（東から）



b. 同上 (北から)



a・調査前近景（西から）



b・表土除去（西から）



a. 古墳群近景（南東から）



b. 同上調査風景（西から）



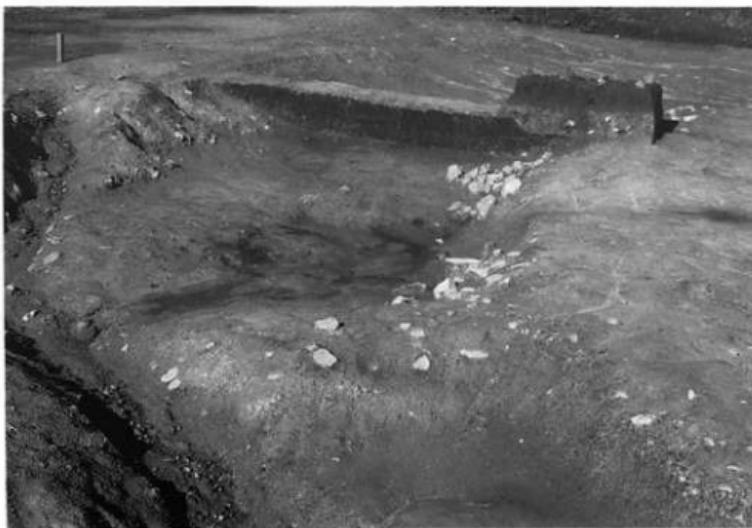
a. 古墳全景（南から）



b. 同上（北西から）



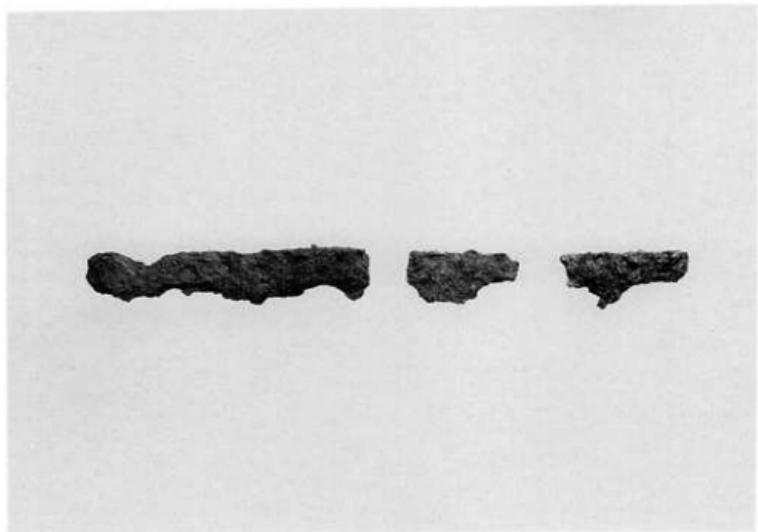
a. 盛土の状況（南西から）



b. 陸橋部（南から）



a. 性格不明の遺構



b. 古墳出土の鉄刀

糸井馬場第1号古墳

1988

昭和63年3月31日 発行

編集 広島県立埋蔵文化財センター
広島市西区観音新町4-8-49
電話 (082) 295-5451

発行 広島県教育委員会
印刷 株式会社 ニシキプリント